現代言語学辞典

Seibido's
DICTIONARY
OF
LINGUISTICS

編集主幹
田中　春美

編集・執筆
樋口　時弘
家村　睦夫
五十嵐康男
倉又　浩一
中村　　完
下宮　忠雄
田中　幸子

成美堂

現代言語学辞典

Seibido's
DICTIONARY
OF
LINGUISTICS

編集主幹
田中　春美

編集・執筆
樋口　時弘
家村　睦夫
五十嵐康男
倉又　浩一
中村　　完
下宮　忠雄
田中　幸子

成美堂

現代言語学辞典
Seibido's Dictionary of Linguistics

1988年2月1日 初版印刷　1988年2月10日 初版発行

編者代表　田　中　春　美
発行者　佐　野　義　光

発　行　所
株式会社　成　美　堂
〒101 東京都千代田区神田小川町 3—22
電　話　03（291）2261番
振　替　東　京　4—35856

定価 12,000円　送料 500円
（落丁・乱丁本はお取替え致します）
（東洋経済印刷株式会社 印刷・秀美堂 製本・広瀬郁 装幀）
ISBN 4-7919-6501-9

序　　文

三十数年前の学生時代を振り返ってみると，当時は言語学を専攻するのは物好きという印象を，一般の人々に与えていたような気がする．言語学をやると言えば，古い言語やあまり人の知らない言語をいくつも勉強する学問だと，思われていた時代であったからである．確かに伝統文法は退屈で，陳腐な感じを与えていた．それに対して，第二次世界大戦後，米国から流入して来たアメリカ式構造言語学は，新鮮な学問と感じられた．さらに，ミシガン大学のオーラル・アプローチなどのおかげで，英語教育に役立ちそうな知見を与えてくれる学問であることが分かり，多数の英語関係者や，中学・高等学校の英語教師およびその志望者に注目され，次第に言語学の理解者の範囲が広がってきた．

1960年代以降は，変形文法(または生成文法)による理論的転換が行なわれ，それ以前の言語学に親しんできた者には，大きなとまどいを感じさせたが，若い世代には不思議なほど共感をもって受け入れられた．そしてまた，大部分の変形文法学者が英語を素材としていたためもあって，多くの英語専攻者が変形文法を学び，そのためにいつの間にか，英語学と言語学とがほとんど同義と考えられるようになっている．これについては，異論がないわけではないが，それは別として，言語学を専攻する者の数は，ますます増加してきている．しかも，変形文法のおかげで，驚くほど多くの他科学の研究者が，言語学の発展に関心を抱き，その動向に注目している．1982年に東京で開催された第十三回国際言語学者会議に，いかに数多くの日本人学者が参加したか，また，1987年の東ベルリンの第十四回大会にも，予想以上に多くの日本人学者が出席したことなどを思うと，編著者達の学生時代とは隔世の感がある．

しかし，言語学がそれだけ関心の高まっている学問分野であるにもかかわらず，言語学一般の用語を数多く含んだ英語学辞典や国語学辞典などは，すでにいくつか出版されているけれども，言語学全般にわたる本格的な言語学辞典は，翻訳されたものを除いては，いまだ一つも出ていない．言語の研究は遠く古代に始まるが，独立した科学として研究されるようになってからでも，すでに二世紀の年月が経ち，その間にさまざまな事実が研究・紹介され，また種々の学説や理論が提起されてきた．現在も言語の研究はますます発展を続けている．そして，上述のように，我国でも世上の関心はいよいよ高まり，研究者も年々著しく増加している．このような状況下にあって，新旧にかかわりなく言語学全般にわたる用語辞典を編

集刊行することは，研究者ばかりでなく，これから言語学を学ぼうとする人々にも，少なからぬ便宜を図ることになるのではないかというのが，本辞典の編集刊行を企図したそもそもの理由である．その意味で，本辞典は，言語学の専門家だけでなく，関係のある諸科学の研究者，日本語および外国語教育関係者，言語学専攻，および英語学など関連分野専攻の大学院・学部学生，一般社会人の方々などにも，手軽に利用していただくことを主眼としている．

本辞典は，古代から現代に至る言語研究の諸分野の用語を，できるだけ網羅的に取り上げるようにした．使いやすさを眼目として，小項目主義を採り，用語に簡潔な定義と平明な解説をつけ，日本語と英語を中心に具体例を挙げるようにした．重要な項目には相応の紙面を費し，内容的に関連のある事項は，詳細なクロス・レファレンス(他項目参照)で指示した．諸分野の配分に関しては，できるだけ偏りのないように配慮した．新言語学(特に変形文法)と応用言語学は日進月歩であるので，すべての用語を網羅することは不可能であるが，重要と思われるものはできるだけ多く取り上げたつもりである．巻末の種々の付録や索引は，多くの方々の便宜を考え，また本文の不備をいささかでも補うために付けたものである．

執筆者と担当分野は次のとおりである．

田中　春美	言語学一般，変形文法，数理言語学，言語教育
樋口　時弘	文法，言語学一般，修辞学
家村　睦夫	音声学，言語地理学，修辞学，言語学一般
五十嵐康男	音韻論，言語教育
倉又　浩一	意味論，修辞学，文体論
中村　　完	文字学，言語学一般
下宮　忠雄	歴史・比較言語学，韻律論，言語学一般
田中　幸子	社会・人類言語学，心理・神経言語学，文法

なお，次の分野では一部，下記の方々にご援助をお願いした．

文体論	山中　桂一
意味論	唐須　教光，米山　三朗
心理言語学	大津　由紀雄
体系文法ほか	辻　星児
変形文法	天野　政千代
関係文法	大塚　達雄

これら七名の方々には，早くから立派な原稿を頂戴しながら，編集主幹の私の都合で仕事が遅れたばかりでなく，他との釣り合い上，原稿を私の判断で一部修正させていただいた．このことに対して深くお詫び申し上げるとともに，ご援助を賜ったことに心から感謝申し上げる．また，後藤斎氏は，校正刷の段階で，読者の立場から全体を通読され，数々の有益な助言を与えられた．記して厚くお礼申し上げたい．

思えば，本辞典を企画したのは，1980年の秋のことであった．以来早くも七年が経過し，ようやく世に出る運びとなったが，その間に編著者の一人である倉又浩一氏が，執筆途上不

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

幸にして病に倒れ，完成を見ることなく，前途有為の身をもって帰らぬ人となられた(1983年11月)ことは，悔んでも余りあることであり，ここに深く哀悼の意を表する．

最後に，長年に及ぶ作業を忍耐強く，かつ暖く見守りつつ推進してくださった成美堂社長佐野義光氏，および平岩清氏，担当者としてすべての業務を引き受けられた谷口隆氏，その他すべての社員各位に，心からの感謝を捧げたい．また，編著者中の樋口時弘氏には，私の代わりにしばしば編集の中心になっていただき，家村睦夫氏には校正のまとめや雑務を引き受けていただいた．これら多くの方々の暖いご援助と辛抱強いご努力がなければ，この仕事も挫折してしまったことであろう．

この辞典が，一人でも多くの方々に利用され，言語学への理解が少しでも深まることを，心から願っている．

1987年10月3日

ホノルル市，ハワイ大学にて

田中　春美

凡　　例

1. 見出し語

1) 見出し語は，原則として英語で示す．

配列は，アルファベット順による．二語以上から成るものも，ハイフンの有無に関係なく，見出し語全体のアルファベット順とする．ä, å は a，ö, ϕ は o，ü は u，ß は ss と同じに扱う．

2) 英語以外の言語は，イタリック体とする．

例：***Ablaut, koinē***

3) 日本語は，ヘボン式ローマ字で表わす．ただし，「ん」は常に n とする．

例：***Yamadabunpō***

4) （　）は，省略可能であることを示す．

例：**ablative (case), vocal c(h)ords**

5) 見出し語が特殊な複数形になるものは，適宜示す．

6) 発音記号は，必要と思われるものについてのみ付ける．英語の発音は，原則として英音を示す．

7) 見出し語と同意の用語で，よく用いられるものは空見出しとして立て，それ以外の場合は，本文中に「…ともいう」として示す．

2. 日本語の用語

見出し語に対する日本語の用語は，一般的と思われるものを二つを限度として《　》で示し，ほかにもある場合は，本文中に「…ともいう」として示す．

3. 分野表示

見出し語の分野別は，日本語の用語の次に，下記の略語によって示す．

(言) 言語学一般	(音) 音声学・音韻論
(文) 文法(変形文法以外)	(変) 変形文法
(意) 意味論	(字) 文字学
(史) 歴史・比較言語学	(地) 言語地理学
(修) 修辞学	(体) 文体論
(律) 韻律論	(社) 社会・人類言語学
(心) 心理・神経言語学	(数) 数理言語学
(教) 言語教育	

4. 見出し語内の区分

1) 一つの見出し語が二分野以上で用いられる場合は，ローマ数字 I，II...で分け，日本語の用語が異なるものは，それぞれ別に示す．二分野以上にわたっても，分ける必要のない場合は，（　）に分野だけを示す．

2) 一つの分野の中で，本文に区分が必要な場合は，アラビア数字 1，2...で分け，さ

らに小区分が必要な時は，(1), (2)...，または (a), (b)...などを適宜用いる．

5．本文中に用いられている主な記号・略語など

（　）　欧文用語・訳文・省略可能のまたは読み替える語句・固有名・年号・補足的説明など

［　］　発音記号　例：cinco［θíŋko］

／　／　音素表記　例：/p/-/b/，/tuk/(took)

｛　｝　形態素表記　例：｛ハナ｝（花）

～　前略・後略　例：「～から」，he must ～

交替　例：/-s/～/-z/～/iz/，b*i*nd（結ぶ）～b*a*nd（バンド）～b*u*nd（きずな）

>，<　変化・由来・派生など

例：古期英語 stān>近代英語 stone，「ゴリラ」＋「くじら」>「ゴジラ」，finnask（見出される）<finna sik（自分自身を見出す）

→，←　変化・移行など

例：paideúō（私は教育する）→ pepaídeuka（私は教育した），［a**o**sora］→［a**oz**ora］

／　交替

例：there is/are，ラテン語 tegō/toga で e/o

—　語形変化・活用など

例：book—books，sing—sang—sung

：　対立

例：「母音性」（VOCALIC）：「非母音性」（nonvocalic），/p/：/b/

＊　再建形・推定形

例：印欧祖語 *pətḗr（父），ゲルマン祖語 *wulfaz（狼）

非文・非文法的表現

例：*Colorless green ideas sleep furiously.　*He married she.

⇒　変形操作

例：X＋be en＋V＋by someone＋Y ⇒ X＋be en＋V＋Y

略語　OE（古期英語），ME（中期英語），ModE（近代英語），ON（古ノルド語），cf.（参照，比較），その他

6．参照の指示（クロス・レファレンス）

参照の指示は，スモール・キャピタルで示す．

1）空(ｸﾞﾘｺﾞﾘｺﾞﾘ)見出しの場合

例：**consonant shift** ⇨ GRIMM'S LAW

2）本文中の場合

見出し語につけた日本語の用語と同じ場合

例：「…態（VOICE）の一種で…」

見出し語につけた日本語の用語と異なる場合と，内容上関連ある場合

例：「…いわば社会言語学的(⇨ SOCIOLINGUISTICS)…」,「象徴的な音で表わすこともできる（⇨ SOUND SYMBOLISM)…」

3) 項目として，他の項目と関連のある場合は，項目の記述の末尾に ⇨ をつけて示す．

4) 見出し語に（　）のあるものを，本文中に参照の指示として示す場合は，原則として括弧の部分を省略する．また，空見出しや項目の記述の末尾につける場合は，括弧を省略する．

5) 記述のある項目も空見出しもない用語は，日本語の用語の後の（　）に，ローマン体のローマ字で示す．

目　　次

序　文 ……i
凡　例 ……vii
言語学辞典 …… 1
言語学年表 ……739
主要言語学者一覧 ……743
世界の言語 ……746
世界の文字見本 ……753
文字の系統表 ……760
世界言語地図 ……762
主要印欧語根表 ……766
国際音声字母 ……768
参考文献 ……769
　欧文文献 ……770
　定期刊行物 ……793
　日本語文献 ……796
　邦訳文献 ……801
英・独・仏語主要用語対照表 ……807
和欧対照表 ……831
索　引 ……867

A

Abbild(ungs)theorie 《模写説》(言)

マルクス主義的言語学の用語で，言語は人間の意識を通して客観的な実体を観念的に反射させて表現したものであるという説．したがって，反射説(Widerspiegelungstheorie)ともいう．反射とは，ドイツ語の用語にみられるように，「鏡に映す」ことである．言語記号は思想の模写，すなわち概念や陳述を唯物的(material)に実現したものと定義される．言語表現とその思想的対応物との関係を研究することが，意味論(SEMANTICS)の課題である．

abbreviation

I. 《短縮》(音)　⇨ CONTRACTION, LOSS

II. 《短縮，省略，略語》(文)

1.　語形成 (WORD FORMATION) の一種で，多音節語や複合語の頭部・中部・尾部などを省略して短い語を作ること．CLIPPING, SHORTENING ともいい，作られた語を切り株語 (stump word) という．短縮は，話しことばで頻繁に行なわれ，俗語や仲間うちの隠語などに多くみられるが，現在ではせわしない世情を反映して，発音・書記のわずらわしさを避けるために，新聞・雑誌・放送などにも普通に行なわれる．例えば，英語 lab(oratory) (ラボ)，pub(lic house) (酒場)，(omni-)bus (バス)，(in)flu(enza) (インフルエンザ)；(プラット)ホーム，アマ(チュア)，トレ(ーニング)パン(ツ)，テ(ープ)レコ(ーダー)，入(学)試(験)，原(子力)潜(水艦)，高(等学)校など．語群の頭文字を組み合わせて作る頭字語 (ACRONYM) も，短縮の一種である．例：laser (<*l*ight *a*mplification by *s*timulated *e*mission of *r*adiation)′(レーザー)など．日本語の漢字語の短縮の方法も，これに似たものである．例：経(済)団(体)連(合会)，農(林)水(産)省など．

2.　書きことばとして，語や語群の文字を省略すること．このようにして作られた語や文字(群)を略語という．読み方は原則として省略しない元の語の読み方で読むが，文字をそのまま読むものもある．例：Sept. (September), Mr. (mister), No. (number), p. (page); B.B.C. (英国放送協会)，U.S.A. (アメリカ合衆国)，NHK (日本放送協会)，DJ (ディスクジョッキー)など．

ablative absolute 《絶対奪格》(文)

ラテン語などで，主語・述語関係で表わされるような内容を一種の副詞句によって表わす場合に用いられる奪格．例：ラテン語 *urbe captā* (町が占領されたので)，*mē puerō* (私が少年だった時)など．

ablative (case) 《奪格》(文)　格 (CASE) の種類の一つ．従格ともいう．典型的には空間的な分離，つまりある場所から離れることを表わす格．ただし，実際には奪格の機能は言語ごとに多様で，空間的・時間的にさまざまな関係を示す．ラテン語の奪格は印欧祖語の処格 (LOCATIVE)・具格 (INSTRUMENTAL) の文法的機能を吸収したため，「～から」「～において」「～によって」などの意味・用法をもっている．例：*Rōmā* nāvigat (ローマから出航する)，in *silvā* habitant (彼らは森に住む)，*equō* adveniet (馬で着くだろう)など．場所の奪格 (ablātīvus locālis) のほかに，*autumnō* redibit (秋に彼は戻るだろう)のような時の奪格(ablātīvus temporis)や起源・原因・材料・付随・性状その他の表示に奪格が用いられる．

近代英語や日本語で奪格の概念を表わすのは，from, with, by, in, at や「から」「に」「で」などの小辞 (PARTICLE) である．

Ablaut [áplaut]《アプラウト，母音交替》(史)　英語 sing, sang, sung, song におけるように，同じ語源の語形の間にみられる母音の交替．ドイツの言語学者グリム (J. Grimm) の用語．英語では gradation (H.

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

Sweet), あるいは apophony (O. Jespersen; Ablaut をギリシア語を用いて訳したもの)という. 英語やドイツ語では, 強変化動詞(STRONG VERB) の変化や, 同系の動詞と名詞の間にみられる. bind, bound; band, bond, bundle など. 印欧語 (INDO-EUROPEAN) においては e/o の交替が最も顕著で, ラテン語 tegō (覆う)/toga (覆うもの, 上衣) や, ギリシア語 légō (言う)/lógos (ことば) の語幹母音にみられる. このように交替する母音を e 階梯 (*e*-grade), o 階梯 (*o*-grade) という. アプラウトには, e/o のように音質が変わるもの (⇨ ABTÖNUNG) と, e/ē のように音量が変わるもの (⇨ABSTUFUNG) とがある. 母音の相違でも, man/men のようなウムラウト (UMLAUT) と混同しないこと.

abrupt release 《急激解放》(音)　/t/ や /k/ のような破裂音 (PLOSIVE) を調音する際, 息を止めてから急に解放することをいう. abrupt の反対は delayed (延引) で, 破擦音 (/tʃ/, /dʒ/ など) の場合がそうである.

absolute comparative 《絶対比較級》(文) ⇨COMPARATIVE (DEGREE)

absolute genitive 《絶対属格》(文)

属格 (GENITIVE) の名詞・代名詞が統語上で主要語 (HEAD) となったり独立性の強い副詞的要素となる場合を指す. 遊離属格ともいう.

サンスクリットの絶対属格は, 通常「人を表わす名詞・代名詞の属格＋現在分詞」の形式で, 副詞の機能をもつ. 例: paśyatas tasya (彼が見ているにもかかわらず), iti cintayatas tasya (彼がこのように考えている間に) など. サンスクリットの絶対属格は, 絶対処格 (ABSOLUTE LOCATIVE) に比べて用例が少なく, 古典期の詩および後期民衆語に散見される語法といわれる.

近代語の場合, 例えば英語では住居・店・教会・宮殿・病院などに絶対属格が慣用的に用いられる. 例: He stayed at his *uncle's*. (彼はおじの家に滞在した), I went to the *bookseller's*. (私は本屋へ行った), They visited the *St. Paul's*. (彼らはセント・ポール寺院を訪れた), Ther got married at St. *George's*. (彼らはセント・ジョージ教会で結婚式を挙げた) など.

absolute locative 《絶対処格》(文)

サンスクリットなどにおいて, 「名詞 (形容詞・代名詞) の処格＋分詞」の形式で副詞の機能を果たす場合を指す. 通常は名詞と分詞の間に主語と述語の関係が成立する. 遊離処格ということもある.

絶対処格の表わす意味は, 原因・条件・情況・同時性・譲歩などがある. 例: goṣu duhyamānāsu (牝牛の乳がしぼられている時に) など. 絶対処格は, サンスクリットの文献において, 類似の機能をもつ絶対属格 (ABSOLUTE GENITIVE) に比べて用例が豊富である. ⇨LOCATIVE CASE

absolutive (case) 《絶対格》(文)　能格言語, すなわち能格 (ERGATIVE) をもつ言語において, 自動詞の主語および他動詞の目的語に用いられる格. 通常, 格語尾をもたず, 中立格 (neuter case) とも呼ばれる. 能格に対する.

バスク語の例:

絶対格 (中立格, 主格)	gizona (男)
能格	gizonak
絶対格	etxea (家)
能格	etxeak

バスク語文法では絶対格とはあまりいわず, 中立格または主格と呼ぶ.

Gizona (主格) ona (主格) da.
(男は善良である)

Gizonak (能格) etxea (主格) du.
(男は家をもっている)

グリーンランド語の例:

絶対格	angut (男)	igdlo (家)
能格 (関係格)	angutip	igdlup

angut igsiavoq. (男は坐っている)
angutip tiguvâ. (男は(それを)見た)
angutip igdlua. (男の家)

グリーンランド語の能格 (関係格) は, 最後

の例のように所有にも用いられる.

abstract noun《抽象名詞》(文)　名詞(NOUN)の種類の一つ. 抽象的な事柄を指示するために用いる名詞. 例えば, 英語 pleasure (喜び), ドイツ語 die Freude(同上), フランス語 le plaisir (同上); 英語 diligence (勤勉), ドイツ語 der Fleiß (同上), フランス語 l'assiduité (同上); 英語 music (音楽), ドイツ語 die Musik (同上), フランス語 la musique (同上)など. 具体名詞(CONCRETE NOUN)に対する.

抽象名詞・具体名詞という分類は, 意味を基準とした伝統的な分類法の一つであるが, 個々の言語について適用すると, 客観性・一貫性を保持しがたい面がある. また, 形態論的特性からみれば, 不可算名詞(UNCOUNTABLE NOUN)の一部として処理するほうが妥当であろう.

抽象名詞は性質・属性・状態・動作・行為などを表わすので, 原則として複数形をもたず, 数を表わす限定詞と共起しない. ただし, 個々の動作・行為や性質・状態が具現化している場合には, 可算名詞(COUNTABLE NOUN)となる. 例: 英語 the pleasures (of meat and drink)([飲食の]楽しみ), ドイツ語 die Freuden(いろいろな楽しいこと), フランス語 un réel plaisir (本当に楽しいこと); 英語 beauties(美しいもの, 美人), ドイツ語 die Schönheiten (同上), フランス語 les beautés (同上)など.

Abstufung [ápʃtu:fuŋ]《母音音量交替》(史)

アプラウト(ABLAUT)の一種. 古期英語 wæs/wǣron (>was/were) におけるように, 同じ語の語形変化表系列(PARADIGM)にみられる母音の音量の交替. (このsがrになるのは, r音化(RHOTACISM)と呼ばれる現象) 英語 ride (乗る)と過去分詞 ridden の古期英語形 rīdan/(ge)riden には ī/i が, ラテン語「立っている」の不定詞と過去分詞 stāre/status には ā/a が現われる. 古い言語においては, 長短の交替は屈折要素にもみられる. 例: ギリシア語 pat-ḗ-r (父は), pat-é-ra (父を)など.

Abtönung [áptø:nuŋ]《母音音質交替》(史)

アプラウト(ABLAUT)の一種. 英語の強変化動詞(STRONG VERB) sing—sang—sung や, 動詞と名詞 sing/song にみられるように, 母音の音質が変わること. sing/sang/sung の母音交替i/a/uは, 印欧祖語(PROTO-INDO-EUROPEAN)においては e/o/ø (ゼロ)であり, それぞれ e 階梯 (*e*-grade), o 階梯 (*o*-grade), ゼロ階梯 (ZERO-GRADE) という. 古い言語においては, 音質交替は語幹ばかりでなく, 屈折要素にもみられる. 例: ギリシア語 lúk-o-s (狼は), lúk-e (狼よ!)など.

accent《アクセント》(音)

1. 発話(UTTERANCE)の中にある特定の音節(SYLLABLE)や語を際立たせること, しかも際立たせる個所の配置が社会慣習的に決まっていること. 際立たせる手段としては, 音の強さ(INTENSITY)や高さ(PITCH)を変化させることが利用される. 音の強さを増すとそれにつれて高さも増すなど, これらには相関関係が認められ, 実際には混合した状態で現われるが, どちらの手段が音韻論的機能を果たすかによって, アクセントは, 強さ(強弱)アクセント(STRESS ACCENT)と高さ(高低)アクセント(PITCH ACCENT)に分けられる. アクセントは語についていうことが多いが, 文中の特定の語を際立たせる場合もあり, これを文アクセント(SENTENCE ACCENT)といい, 語アクセント(word accent)と区別することがある.

強さアクセントには, チェコ語やハンガリー語(常に第一音節), ポーランド語(末尾から二番目の音節)のように, アクセントの位置が一定している固定アクセント(FIXED ACCENT)と, 英語やロシア語のように, アクセントがいろいろな位置を占めうる自由アクセント(FREE ACCENT)がある. 一方, 高さアクセントには, 北京語(中国語の一方言)の四声(SHISEI)のように, 一つの音節内で高さが変化する音節音調(syllabic intonation)または声調(TONE)と呼ばれる音節高さアクセ

ントと，日本語のアクセントのように，語中の音節相互の高さが変化する語音調(word intonation) と呼ばれる語高さアクセントがある．一語中に二つのアクセントがあって，一方が他方より強い(高い)時，前者を第一(主)アクセント (primary accent)，後者を第二(副)アクセント (secondary accent) という．例えば，英語の personality [pə̀:sənǽliti] は，第三音節に第一アクセント，第一音節に第二アクセントがある．

アクセントの機能は，語の境界を示すこと(例えば，ハシ(箸)とハシ(橋)；ドイツ語 úmgehen (付き合う) と umgéhen (避ける))，文法的に区別すること(例えば，ロシア語 rúki(手)(複数主格) と rukí (手の)(単数属格))などである．
⇨SUPRASEGMENTAL PHONEME

2. アクセント記号 (ACCENT MARK) のこと．第一・第二アクセントを，普通は [ˊ] [ˋ] で，国際音声字母 (IPA) では [ˈ] [ˌ] で表わす．例えば，communication [kəmjù:nikéiʃən] [kəˌmju:niˈkeiʃən] など．なお，フランス語の正書法上の「ˊ」「ˋ」「ˆ」は，それぞれ鋭アクセント(ACUTE ACCENT)，低アクセント(GRAVE ACCENT)，曲アクセント (CIRCUMFLEX ACCENT) と呼ばれるが，音声上のアクセントとは関係がない．

3. 個人の発音上の特徴，俗にいう「なまり」のことを指す場合がある．これは個人の出身を示すことがあり，特に地域によるものを地域アクセント(regional accent)，社会的階層によるものを社会アクセント (social accent) と呼ぶことがある．

accent mark 《アクセント記号》(音)

アクセントを表記する記号のこと．強さアクセント(STRESS ACCENT)を示す [ˊ ˋ]，高さアクセント (PITCH ACCENT) を示す [¯] などの記号のこと．例えば [intənéiʃən] [kōkōro] など．中国語をローマ字表記する場合につける ¯ ˊ ˇ ˋ は，四声 (SHISEI) を表わす．例えば，mā (母親)，má (麻)，mǎ (馬)，mà (ののしる)．古典ギリシア語の文字の上につけられる ´ ` ˆ は，高さアクセントを示した．

フランス語の正書法でも ´ ` ˆ の記号を使用し，アクサン(accent) と呼ぶが，母音の種類を表わす記号であって，必ずしもアクセントの位置を示すものではない．

accent type 《アクセントの型》(音)

ある言語の語のアクセントの配置にみられる類型のこと．例えば，日本語の東京方言の三音節から成る語は，イノチのように第一音節が高く，第二音節以下が低い型(上下下型)，ヒクイのように第二音節が高く，第一・第三音節が低い型(下上下型)，アタマのように第一音節が低く，第二音節以下が高い型(下上上型)の三つの型のいずれかに属し，その他の型はない．このようなアクセントの配置にみられる決まりをアクセントの型という．二音節語・四音節語などにもそれぞれある数の型がある．一音節語も助詞をつけると型が区別される(例：ヒガ(火が)：ヒガ(日が))．同じ音節数の語でも方言により型の種類と数が異なる．個々の型はいくつかの型式に分類できる．音の下降する直前の音節(ヒクイでは第二音節)を，アクセント核 (AKUSENTOKAKU) というが，アクセント核のない型を平板型(または平板式)，アクセント核のある型を起伏型(起伏式)といい，起伏型はさらに，頭高(あたま)型・中高(なか)型・尾高(おだか)型に分けられる．

アクセントの型は通常，高さアクセント (PITCH ACCENT) について言うもので，言語または方言により一定の型がある．例えば，四声 (SHISEI) は中国語のアクセントの型である．音韻論的立場から，アクセントの型を音調素または声調素 (TONEME) という．

accentual system 《アクセント体系》(音)

ある言語(または方言)に現われるアクセント (ACCENT) の方式や型の総体のことで，その研究は音韻論 (PHONOLOGY) の一部門を成す．

accentuation 《アクセントづけ》(音)

ある語または音節にアクセント (ACCENT)

をつけて発音すること．あるいは，音声記号(PHONETIC SIGN)や文字にアクセント記号(ACCENT MARK)をつけること．

acceptability《容認可能性》(言)
⇨ GRAMMATICALITY

accidence《語形論》(文)　名詞・代名詞・形容詞・動詞などの文法的語形変化，つまり屈折(INFLECTION)の記述とその研究．スウィート (H. Sweet) やカーム (G. O. Curme) が統語論(SYNTAX)に対立する概念として用いたが，今日はあまり用いられず，形態論(MORPHOLOGY)の中に含まれる．

accidental gap《偶然のすき間》(音)
言語においては，それぞれに固有の単位が体系を成して使われている．例えば，現代日本語では，アイウエオという母音が /k/ と組み合わされるとカキクケコ (/ka, ki, ku, ke, ko/) となる．ところが，ヤ行では体系的にみれば，カ行と同じように /j/ と母音の組み合わせが可能なはずであるのに，/ji/ /je/ は使われていない．このように，個々の単位の組み合わせのうち，体系的には可能なはずであるが，実際には現われない欠落部分を「偶然のすき間」といい，体系的に不可能な組み合わせである「体系的すき間」(systematic gap)に対する．

英語で言えば，語頭では，子音は三つまで連続することが可能である．しかしその場合，最初の子音は/s/しかない．このような時に，/s/ 以外の子音はすべて「体系的すき間」ということになる．また，/blik/ という分節素の組み合わせ「b-l-i-k」は英語に存在しないが，「bl＋母音＋k」という連続はあり (block /blɔk/)，体系的には可能なのに実際は存在しないので，「偶然のすき間」ということになる．

ただし，この区別も，どの程度までを体系として考えるかによって変わってくる．もし /i/ と /ɔ/ は高母音と低母音という点から区別するという基準に立てば，「bl＋高母音＋k」は体系的に存在しないということになり，/blik/ は「体系的すき間」と呼べる．つまり，どこまでを体系の単位とするかが鍵であるということである．

accuracy《正確さ》(教)　⇨ FLUENCY

accusative (case)《対格》(文)　格(CASE)の種類の一つ．印欧諸語において，典型的には他動詞の直接目的語の統語機能をもつ格．例：ラテン語 videō *puellam*.（私は少女を見る）など．ラテン語の対格は上記の機能のほかに，目的地(*Athēnās* (アテネへ))・時間・距離(*sex pedēs* altus (6フィートの高さ))・場所を示す副詞などに相当する機能をもつが，ウラル諸語ではこれらの機能は入格 (illative)・向格 (allative)，その他が果たす．近代英語の代名詞の him, her, them, whom などを対格と呼ぶ人もいるが，古典語などと異なり，与格その他の格との対立を欠き，また機能的にも共通する部分が少ないので，英文法では通例，目的格 (OBJECTIVE) という用語を用いる．ドイツ語文法では四格ということもある．

accusative of description《記述の対格》(文)　事物の大きさ・形状・色・価格や人の年齢・職業などを表わすのに用いられる，形容詞の機能をもつ名詞．objective of description, accusative of quality, descriptive accusative などともいう．例：What *nationality* is he?（彼はどこの国籍の人か），This is good *quality*.（これは良質のものだ）など．ただし，accusative というのは伝統的な名称で，形式上対格のない英語の場合は，必ずしも適切な呼び方ではない．

accusative of exclamation《感嘆の対格》(文)　感嘆の気持を表わす表現に用いられる英語の me のこと．しばしば特定の語句とともに現われ，間投詞的な性質を示す．例：Dear me!（おやまあ），Gracious me!（同左）など．

accusative with gerund《動名詞付き対格》(文)　動詞または前置詞の目的語である名詞/代名詞に動名詞が続く形式．例：She could not help the *tears* filling her eyes.（彼女は涙が目にあふれ出るのを止められなかった）など．

この形式では，名詞/代名詞は動名詞の意味上の主語となる．古期英語以来18世紀頃までの英語では，この場合の名詞/代名詞は属格(GENITIVE) を用いるのが普通であった．その後発達した非属格形を特にこの名称で呼んでいるが，対格が形態上主格や与格との区別を失っている現代英語の名詞では，対格は適切な名称とはいえないが，慣用上この用語が使われている．

accusative with infinitive《不定詞付き対格》(文)　動詞または前置詞の目的語である名詞/代名詞に不定詞が続く形式．例: He heard the *door* open.(彼はドアが開くのを聞いた)，She told her *child* to be quiet.(彼女は子供に静かにするようにと言った)など．

この形式では，名詞/代名詞は不定詞の意味上の主語となる．印欧諸語で古くからこの形式をとるのは，使役動詞の場合が典型である．特にラテン語では，不定詞付き対格が好まれる構造の一つとなっており，命令・許可・禁止・伝達・知覚などを表わす動詞には，しばしばこの形式が用いられる．例: vetās *puellās* natāre.(君は少女たちが泳ぐことを禁ずる)など．

accusative with participle《分詞付き対格》(文)　他動詞または前置詞の目的語——古典文法では対格(ACCUSATIVE)——に分詞が後続して，目的語と分詞の間に意味上の主語・述語関係が成立する形式．例: I heard *someone calling* me from behind.(誰かが後ろから呼んでいるのが聞こえた)，He found *his car broken.*(彼は車が故障しているのに気づいた)など．不定詞付き対格(ACCUSATIVE WITH INFINITIVE)，動名詞付き対格(ACCUSATIVE WITH GERUND) などに対する．

現在分詞の場合は，通常は継続相(DURATIVE) の意味を表わし，他動詞の過去分詞の場合は通常は受動態の意味を表わす．変移動詞(MUTATIVE VERB) の過去分詞は完了相(PERFECTIVE) の意味を表わす．

acephalous [əséfələs]《首節欠落の》(律)

詩行の初めに弱音節が一つか二つ欠落していると考えられる詩行をいう．例えば，チョーサー (G. Chaucer) の『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) 冒頭の Whán that Áprille with his shóures sóote (四月がそのやさしい雨で…する時)は，|(×)ˊ|×ˊ|×ˊ|×ˊ|×ˊ|× の行頭に弱音節が欠落していると考えられる．語源はギリシア語 a-(否定)＋kephalé (頭)．

achievement test《アチーブメント・テスト》(教)　教えたことがどれくらい学習者の身についたかを調べるテスト．アチーブメントは到達度を指し，教師がある量の教材をある目的をもって教えたのち，どれくらい理解したか，あるいはどれぐらい自分のものとして使うことができるか知りたい時に使われる．このテストでは，問題は教えた範囲内から出され，教師が自分の進度に応じて作るのが普通である．

一方，能力テスト (PROFICIENCY TEST) は，ある分野(例えば，ヒアリング)の全体的な力をみるためのテストで，問題はやさしいものからむずかしいものまで含み，受験者がどの程度の力をもっているかを，はっきり分類できるように作られたテストをいう．言語能力テスト(language proficiency test) といわれるものは，聴解・読解・作文などの面について，それぞれ発音・語彙・文法など広い項目にわたってどのような能力をもっているかを調べるテストである．⇨ APTITUDE TEST

Ach-Laut [áxlaut]《アッハ音(ラウト)》(音)

後舌面を軟口蓋に接近させ，呼気を摩擦させて作る無声軟口蓋摩擦音 (voiceless velar fricative) [x] のこと．冷たい手にハーと息を吹きかけるような，かすれた感じの音．ドイツ語で [a, a:, ɔ, o:, u, u:, au] の後の ch がこの音で発音され，ach (間投詞「ああ」) に現われるので，これを代表させてアッハ音と呼ぶ．音韻論的には，イッヒ音(ラウト) (ICH-LAUT) [ç] と相補分布 (COMPLEMENTARY DISTRIBUTION) を成す．オランダ語の ch (例: Utrecht [ýtrɛxt] (地名))，スペイン語の j (例: Juan

[xuan]（人名））なども，この音で発音される．なお，対応する有声音は［ɣ］．

acoustic feature《音響的特徴》(音)

物理学的分析を行ない，周波数(FREQUENCY)・振幅(AMPLITUDE)・倍音(harmonic)などの音響学的性質から捉えた言語音(SPEECH SOUND)の特性のこと．これによって，調音(ARTICULATION)的・生理学的な言語音の識別・分類とは別に，音響学的識別・分類が可能になった．ヤーコブソン(R. Jakobson)らは，言語音のもつ弁別素性(DISTINCTIVE FEATURE)の記述に音響的特徴を取り入れた．⇨ACOUSTIC PHONETICS, FORMANT, SOUND SPECTROGRAPH

acoustic image

I. 《聴覚映像》(言)　ソシュール(F. de Saussure)の用語で，物理的音声が言語主体の意識に残す刻印のこと．聴覚心象，音のイメージなどともいう．例えば日本人は，幼少の頃から「イヌ」という実際の音声を何回となく耳にする．現実の音声は，音の大きさや高さ，音色などさまざまな属性を伴っているが，個々の音声の記憶印象が重なるにつれて，それらに付随している属性が捨象されて，どの特定の音声の印象でもない，「イヌ」という音の記憶が形成される．犬を見たり思い出したりすると，「イヌ」という音声を発する前に「イヌ」という音を思い浮かべる．これが聴覚映像である．ソシュールは，この聴覚映像と概念(CONCEPT)とが結合したものが，記号(SIGN)であるとした．

II. 《音響像》(音)　音響音声学では，スペクトログラフを使った音響データが音分析の手がかりとなる．この時の画面(スペクトログラム)に現われた音の姿を指す．基本周波数・振幅・倍音の変化により，その姿が変わるが，母音ではフォルマント(FORMANT)の現われ方が重要な手がかりとなる．

acoustic phonetics《音響音声学》(音)

言語音(SPEECH SOUND)を音響学的方法と手段によって音(おと)として捉え，これを物理学的に研究する科学．調音音声学(ARTICULATORY PHONETICS)・聴覚音声学(AUDITORY PHONETICS)と並んで音声学の一部門を成す．言語音の性質を決定するのは，音の高さ(PITCH)・強さ(STRESS)・音色(TIMBRE)である．これらはそれぞれ音波の周波数(FREQUENCY)・振幅(AMPLITUDE)・波形とこれらの相互関係に依存しているが，電子工学の発達によりこれらの精密な測定・記述が可能になっており，とりわけ音響スペクトログラフ(SOUND SPECTROGRAPH)の開発によって，言語音のフォルマント(FORMANT)による分析研究が進められ，個々の言語音の音響学的特徴が明らかにされてきている．ヤーコブソン(R. Jakobson)らは音響音声学の成果をふまえ，言語音の音響学的特徴を基にして，音素の弁別素性(DISTINCTIVE FEATURE)を設定した．

acoustics [əkú:stiks]《音響学》(音)

音(SOUND)の構造・性質などを研究する物理学の部門．広い意味では，耳や脳による音の知覚に関する研究分野，すなわち音響生理学や音響心理学も含めることがある．音響学は音一般を扱うが，音の中でもっぱら言語音(SPEECH SOUND)を音響学的に研究する部門を，音響音声学(ACOUSTIC PHONETICS)という．近年，電子工学の発達によって，音の分析・合成ができるようになるなど，音響学は著しく進歩している．

acrolect [ǽkrəlèkt]《上層語》(社)

発音・語彙・文法面において，標準語とわずかに異なる言語変種(VARIETY)を指す．黒人英語(BLACK ENGLISH)や脱クレオール化(DECREOLIZATION)過程にあるクレオール(CREOLE)の話し手で，教育を受けた人々の話す変種が一例である．その場合，大部分は標準語で，わずかに黒人英語やクレオールの特徴が混ざっている．このように，クレオールから標準語に至るさまざまな段階のことばを，クレオール後連続体(post-creole continuum)とまとめて呼ぶことがある．

⇨BASILECT

acronym [ǽkrənim]《頭字語》(言)

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com